

「彼ら」の顔と「我々」の顔 ——『シーザーの記念柱』にみる自己否定する表象システム¹

福井 崇史（中央学院大学非常勤講師）

1. 「リアリズム」の裏のアメリカン・ユートピア

19世紀末アメリカといえば、文学史的には、まず「リアリズム」から「ナチュラリズム」への移行期として想起されるだろう。しかし、その大きな潮流の裏には、ユートピア/ディストピア小説の爆発的流行という軽視し難い現象が存在していた。『コロンビア・アメリカ小説史』(*The Columbia History of the American Novel*)は、この時期に500近い社会福音小説とユートピア小説が出版されたとしているが(228)²、そのほとんどは、ベラミー(Edward Bellamy)の『顧みれば』(*Looking Backward: 2000-1887* [1888年])のような数例の例外を除き、今日の読者の記憶からは放逐されているといっても過言ではない。とはいえ、大西洋を越えた地にさえ、ベラミーのユートピア的企図への否定的返答として、*News From Nowhere* (1890年)を上梓したWilliam Morrisのような人物がいるという事実を顧慮すれば、世紀末アメリカ発のこの文学運動がいかに熱狂的なものであったかは十分に推知しうるだろう。

本稿は、そうしたユートピア作品群に関する研究書を著したロバート・シューター(Robert Shurter)が、“one of the most important and most powerful of all these American utopias” (232)と呼ぶ、イグネイシャス・ドネリー(Ignatius Donnelly)の『シーザーの記念柱』(*Caesar's Column: A Story of the Twentieth Century* [1890年]、以下CC)を批評対象とする。まず、このテキストと同時代の「人種」/民族を巡る議論との関連性を指摘し、その上で作中人物の外見表象に着目する。最終的には、ある文学的装置がテキスト内で濫用されることにより、人物の外見表象を司るシステム、さらにはテキストの表面上の企図が、根幹から揺るがされてしまう瞬間を捉える。

2. 『シーザーの記念柱』、ドネリー、同時代の「不幸な社会状況」

1988年、ニューヨーク。ゲイブリエル(Gabriel Weltstein)は、羊毛の商談のため故国ウガンダを離れアメリカを訪れるが、「金権家集団(Plutocrats)」の支配する近未来都市は、眩しい光に包まれた面が多い分だけ陰の部分もまた多い場所だった。富める少数者に虐げられた圧倒的大多数の人々は、「破壊同盟(the Brotherhood of Destruction)」なる地下組織を結成し、着々と叛乱の時を待っている。そして迎えた全世界規模の血生臭い殲滅戦の後、金権家集団は血の海に沈むが、制御不能に陥った群集は完全なる暴徒と化し、見境のない相互殺戮の渦に飲み込まれる。ゲイブリエルを含むわずかな人間達は飛行艇で脱出し、破

滅へと突き進むアメリカを始めとする西欧諸国家を尻目にアフリカへ向かい、その地にユートピア的共同体を形成する。

『顧みれば』とは比較にならないほどの陰惨さの上に成り立つこの物語の著者ドネリーは、1855年に民主党系の会合におけるスピーチで政治家としての経歴をスタートさせ、政治活動の合間を縫って自ら農業にも従事した正統的農本主義者だ。その彼が、東部の資本家が経済を牛耳る19世紀末アメリカの現状に不満を覚え、ベラミーが先鞭をつけた流れに乗じてディストピア小説ともユートピア小説とも呼びうる物語作品を上梓したことは、ごく自然な成り行きといえる³。その作品は、しかし『コロンビア・アメリカ小説史』ではたった三行で言及されるのみであり、同書でベラミーの著作がほぼ一項目を形成しているのとは顕著な対照を成している。ホフスタッター (Richard Hofstadter) にも“childish” (70) と評されるCCだが、しかしその出版前後の経緯は、19世紀末アメリカを考察しようとする人間がこの作品を安易に軽視することを許さない。ドネリーが持ち込んだCCの原稿は、Harper and Brothers、Charles Scribner's Sons、Houghton Mifflinといった出版社に、主に「過激すぎる」という理由で悉く拒絶される⁴。漸く出版の運びとなると、初年度に6000部を売り上げた後、ドイツ語、スウェーデン語、ノルウェー語に翻訳され、(著者自身の見積もりによれば) 1899年にはアメリカで23万部、ヨーロッパで45万部を売り捌いたという。その数字の真偽は別としても、これが“one of the most widely read books of the early nineties”であることはホフスタッターも認めるところだ(67)。詰まるところ、今日的視点から「子供じみている」として読み捨てるのではなく、適切な歴史的コンテクストに置き直して読解することが、あるいは歴史化することが、このテキストの分析には不可欠のようだ。

“Who is it that is satisfied with the present unhappy condition of society?” (4) —“TO THE PUBLIC” と題された、冗漫な序文に書き入れられたこの修辭疑問文の検討から、CCの歴史化を開始しよう。この文から始まるパラグラフの内容を考慮すれば、これは富める少数者と飢える大多数という“two hostile camps”が互いに憎しみ合う、当時のアメリカ社会を直接の指示対象とする文、と一旦は読まざるをえない。しかし、同パラグラフ内でドネリーが嘆く労働賃金の低下は、「巨大な企業連合 ([v]ast combinations)」のみによって引き起こされたのではないことを、彼が認識していなかったとは考えにくい。というのは、それに深く関わっていたのは、同時代のアメリカ人が見過ごすにはあまりに大規模な社会事象、すなわち、前代未聞の大量の移民流入だからだ。

1880年代、アメリカは5,247,000人に及ぶ移民を受け入れたが、これ以前のいかなる19世紀中の10年間をとってみても、これとの比較に値する規模の移民流入はない。東部都市地域の工業化事業や西部の鉄道敷設事業が、急場凌ぎの労働力を必要とし、それに応えて大量の移民が流入する。その結果、飽和状態と呼べる状況さえ超えた労働力過多が、1890年代の失業率を記録的なものとした⁵。この無節操な移民受容こそが、労働対価としての賃金を低下させた大きな要因の一つだった。1855年7月4日、「非常な成功」を収めた政治家デビュー時のスピーチの主題を、まさしく「移民」としていたドネリーが (Ridge 11)

⁶、それから30年以上の時を経たとはいえ、経済問題の解決策を模索するアメリカを描いたディストピア/ユートピア小説を書くにあたり、「移民」に言及せずにおれなかったことは想像に難くない。CCを歴史化して考えた場合、ドネリーがその改善を訴える「現在の不幸な社会状況」とは、こうした同時代コンテクストを意味していたと考えられる。

3. 「彼ら」の限定化とステレオタイプの差異化

The over-population of the globe will come soon enough. [...] The silly ancestors of the Americans called it “national development” when they imported millions of foreigners to take up the public lands, and left nothing for their own children. (131)

アメリカへの一時的逗留者という設定の主人公、ゲイブリエルに語らせてはいるものの、CCに刻まれた上記の一文からは、アメリカ人という「我々」と、外国人/移民という「彼ら」を区別しようとする意識が明確に読み取れる。無論、テキスト内のいかなる記述も著者の思想/思考の直接的反映物である、と想定する批評姿勢は、素朴なものを受け取られても致し方ない。だがここで、CCの出版から二年後に発表された、ドネリーの手になる政治的著述を比較材料として提示したい。1892年7月4日、ネブラスカ州オマハで開催された人民党(the National People’s Party)の党大会で、俗に「オマハ綱領(the Omaha platform)」と呼ばれる党綱領が発表されたが、その序文、ならびに本文の一部を執筆したのは、他ならぬドネリーである。序文中には、次のような記述が見出せる——“The urban workmen are denied the right to organize for self-protection, imported pauperized labor beats down their wages [...]” (Tindall 90) また、綱領の本文に含まれる以下の文から、上に引用したゲイブリエルの言葉と共通する響きを聞き取ることは困難ではない——“[W]e condemn the fallacy of protecting American labor under the present system, which opens our ports to the pauper and criminal classes of the world and crowds out our wage-earners [...]” (Tindall 95) 以上を考慮すれば、CC執筆時のドネリーには、移民という「彼ら」を、「我々」と明確に差異化する、更には排除する意図があったと忖度しうる。

CCが具体的に移民について語っている次の箇所は、このテキストが移民を差異化する意図を有していることの興味深い証左となる。

The multitude seemed, so far as I could judge, to be of all nations commingled--the French, German, Irish, English--Hungarians, Italians, Russians, Jews, Christians, and even Chinese and Japanese [...]. (44)

第4章において、相棒のマックス(Maximilian Petion)に連れられて貧民窟を巡り歩クゲイブリエルにより、この一文は発せられる。列挙の仕方に論理性が欠けているという印象

を与えかねない一文だが、適切な歴史的コンテキスト内に再定位することで、ある歴とした法則がこの文を貫いていることが判明する。列挙の開始後、この文が大きく二つに分けられているのは偶然ではない。というのは、前半はいわゆる「旧移民(the Old Immigrants)」、後半は「新移民 (the New Immigrants)」と呼ばれる諸集団を含んでいるのだ。アメリカ史において、さらには同時代においても、19世紀後半までにアイルランド、ドイツ、イギリス、スカンジナビア諸国から渡った移民が前者のように総称されたのに対し、1880年代以降にイタリア、ロシア、ポーランドから渡った人々、また南東ヨーロッパ諸国から逃れてきたユダヤ人たちが、後者のように呼ばれていることは周知の事実である。CCには、このように移民を「旧」・「新」というステレオタイプの二分法を基にして分割した上で、以下にみるように、それらを「我々」と「彼ら」として再集合化しようとする意図があるようだ。

CCが移民諸集団、すなわち種々の民族を表象する際にも、ステレオタイプに依存していることを確認しよう。「金権家集団」の首魁に召使として仕えるメアリー (Mary Callaghan) は、“an honest, stout, rosy-cheeked Irish girl”である(65)。アイルランド人に対する偏見は19世紀全般を通じてアメリカに根強く存在していたが、その状況を反映させてか、ドネリーはメアリーに非正統的な英語を繰り返して発音させることで、彼女が無教養な少女であることを言語上で可視化させる⁷。一方、既に世紀末には都市部に定着し、経済・政治空間で確固たる地位を占めていたドイツ人は、これと全く異なる扱いを受けている。マックスの右腕的存在である“Rudolph”と呼ばれる人物は、表向きはメアリーらを監督する召使長だが、同時に「破壊同盟」のメンバーでもある。ゲイブリエルとの会話の中で自らについて語るところによれば、彼は“Heidelberg”で学び、“a wealthy family”の出であり、“dreams [...] of reforming the world”を持つという(75)。そして、このテキストで最も露骨に敵意をもって表象されているのが、ユダヤ人だ。圧政を敷く「金権家集団」のトップは、「プリンス・キャバーノ (Prince Cabano)」という偽名を用いて生活しているが、その本名は“Jacob Isaacs”である。またテキスト内では、世界の貴族階級は“almost altogether of Hebrew origin”であり、そうした人間たちは“capacity to live where a dog would starve”を有する“the great money-getters of the world”であると語られている(37)。

このようにCCは、移民諸集団をステレオタイプに当てはめて表象し、同時に「新」移民のユダヤ人を「彼ら」とし、「旧」移民からアイルランド人を排除した上で、「我々」を再集合化させる。しかし、「人種」/民族を語る際以外にも、ドネリーはある同時代性の刻印を、このテキストに刻み込んでいる。ステレオタイプ化された表象論理に従い、「我々」と「彼ら」を再定位するCCというテキストの、根幹の動揺へと繋がるその「刻印」を検証しよう。

4. 骨相学/観相学的人物表象

19世紀アメリカを席卷した数々の「科学的」思想の中で、ドネリーとの特別な関わりを疑わせる「学」が一つ存在する。1852年、21才で政治家としての徒弟期を過ごしていた彼は、ニューヨークの有力紙 *Tribune* の著名編集者 Horace Greeley がフィラデルフィアを訪れた際、(政治的見解の相違からというより東部人の貴族的ジェスチャーに対する嫌悪感から) 彼を批判するスピーチを執筆した。そこに見られるのは、ドネリーの思想の純粋な発露というより、紛れもない同時代性の刻印である。

The characteristics common to the heads of visionary, theoretical reformers: that of largeness, fulness [*sic*] or overplus of brains with the front deficient in the development of those organs of judgement [*sic*] necessary to restrain and direct the active forces of the general intellect [...]. (Ridge 10)

これは、ドネリーの最初期の政治的著述であるだけでなく、19世紀中頃からアメリカで隆盛を誇ったある「科学的」思想、すなわち骨相学と彼の繋がりを示しているという意味で、注目に値する。

確認すると、この「学」は、人間の精神的属性に “Firmness”、“Destructiveness”、“Eventuality” といった名称を与え、脳の各部分がそうした能力を司ること、また、その能力の多寡は頭部の形状・外見から読み取れることなどを主張するものだ⁸。だが、この「学」が、そしてアメリカにおいてはこれと抱き合わせの形で広まった観相学が、人間の解剖学的側面——「外見」——と、精神的側面——「内面」——との間に本質的な連関をみようとする思想であることを考慮したとき、何より見逃されるべきでないのは以下の点だ。つまりこうした「学」は、特定の「人種」/民族の「特徴的」外見と、その集団の「特徴的」内面との関係を、「科学的」的に規定しようとした時、いとも容易に「視覚的に特化された人種主義言説」になりうる、ということだ。

頭蓋/顔貌と「人種」/民族とに「科学的」連関をみるという所作も、それが一部の骨相学者達の奇想に留まっている限りは、等閑に付しても許されるであろう。しかし、見過ごせないのは、CC と同年に出版された一定の権威を持つ民族学的著作の中にも、この思考がその痕跡を残していることだ。

ダニエル・ブリントン (Daniel G. Brinton) は、イェール大学卒業後にパリやハイデルベルグでも学業を修め、南北戦争時には北軍の軍医を、更に特筆すべきは、ドネリーがその協会員に選出された⁹ the American Association for the Advancement of Science の会長も務めた人間だ。1890年出版の *Races of Peoples* において、“[t]he traits of the race [...] maintain themselves uniform and unalterable in the pure blood of the stock through all experience” (18) と主張するブリントンが、「人種」を差異化する時に最も重要視するのものが何であるかは、次の引用に明らかだ。

In the present lecture I shall pass in review the physical elements held to be most weighty in the discrimination of racial types; and, first, those relating to

The Bones.---Most important are the measurements of the skull, that science called *craniology*, or *craniometry*. (19 original emphasis)¹⁰

ここで言及されている“*craniology/craniometry*”と骨相学との違いは、前者は後者とは異なり頭蓋の各部分に“*Firmness*”や“*Destructiveness*”といった形で性格/性向の象徴を見出さないことのみであり、頭蓋の各部分の形状等を計測した結果から内面的特質を読み取ろうとする身振りに限れば、両者に何ら変わりはない。この一種の骨相学的知見を基にして、プリントンは、例えば「黒人」の頭蓋に“*a preponderance of the lower mental powers*”、あるいは“*a stronger development of the merely animal instincts*”などを見出している(21、24)。¹¹

こうした発想法の原型である骨相学を、政治家としての揺籃期に自家薬籠中のものとしていたと考えられるドネリーによる作品、*CC* に話を戻そう。このテキストが移民諸集団を扱う際、ステレオタイプの差異化戦略を採用していることは既に確認したが、続いて個別の人物表象、すなわち、何らかの移民集団に属すとされる人物がどのように表象されているかを検証しよう。

兄に宛てた書簡の体裁を採る第1章の冒頭、意味ありげにも“*The Darwin*”と名付けられたホテルの豪華なダイニングルームで、行き交う人々を観察しているうち、女性たち、また男性たちが、それぞれ老若問わずどことなく似ていることに気付いたゲイブリエルは、順にその外見を記述していく。

Their brows were all fine---[. . .] the profiles were classic in their regularity, and marked by great firmness. The most peculiar feature was their eyes. [. . .] [T]heir looks were bold, penetrating, immodest, if I may so express it, almost to fierceness [. . .].

The chief features in the expression of the men were incredulity, unbelief, cunning, observation, heartlessness. I did not see a *good* face in the whole room: powerful faces there were, I grant you; high noses, resolute mouths, fine brows; all the marks of shrewdness and energy; [. . .] but that was all. (18 original emphasis)

顔貌の詳細な観察に基づいて、顔のパーツを性格/性向的特質と結びつけるこれらの記述が、特質のそれぞれに“*firmness*”、“*fierceness*”、“*incredulity*”、“*heartlessness*”といった語彙を充てていることに注意を喚起したい。つまり、これら冗長な語彙を用いてゲイブリエルがここに提示しているのは、人間の「外見」を「内面」と結びつけて論じるという、骨相学/観相学者的身振りの例を *CC* のテキスト内に指摘していくのは、困難なことではない。

「金権家集団」のトップに君臨するプリンス・キャバーノの顔貌を描写する時にも、ゲイブリエルが演じるのは、個人の顔貌を民族性と結びつけるという、人種主義的骨相学/観相学者の所作だ。

He had a Hebraic cast of countenance; his face seemed to be all angles. The brow was square and prominent, projecting at the corners; the nose was quite high and aquiline [...].^{1,2}

こうした顔貌読解は、このテキストにおいて死すべき運命にある「彼ら」に対してだけ機能するもの、というわけではない。以下に引用するのは、物語内で初代大統領の末裔とされ、ゲイブリエルの妻となる人物でもあるエステラ (Estella Washington) との最初の邂逅の後、彼がマックスに語る情熱的な言葉である。これはまた、外見と内面を結びつける論理を決定的に正当化しようとする言述を含んでいるという意味においても、見逃せないものだ。

I feel very confident that the younger of those two women I saw in that carriage is pure. God never played such a majestic and noble countenance over a corrupt soul. *The face is transparent; the spirit looks out of the great eyes; and it is a spirit of dignity, nobleness, grace and goodness.* (54 my emphasis)

このように、CC では顔は「透明」なもの、あるいは性格/性向というテキスト内容を読ませるために記述された言語のようなものとされているのだ。

だが、テキストが表象しているはずの内容が、その表象を支える言語によって転倒させられるという事態は、決して珍しくない。であれば、顔貌を頼りにして「我々」と「彼ら」をステレオタイプの差異化の波に晒そうとするこのテキストが、以下にみるように顔貌の表象そのものによって裏切られることも、ある意味必然と言えるかも知れない。

5. 保証される境界の横断可能性

第2章において、ゲイブリエルはある乞食と出会う。あるきっかけからその人物と行動を共にすることになったゲイブリエルは、続く章で彼の屋敷に通され、そこでマキシミアン・ベティオンという彼の名前と、弁護士という職業を知らされる。“His complexion was dark, [...] his brow was high, broad and square; [...] there was about the mouth an expression of firmness, not unmingled with kindness.”——こうしてお決まりの顔貌読解を始めるゲイブリエルだが、これに続く記述が、このテキストの人物表象システムに対して持つ破壊力の大きさは計り知れない。

But I made up my mind not to trust too much to appearances. I could not forget the transformation which I had witnessed, from the rags of the ancient beggar to this well-dressed young gentleman. I knew that the criminal class were much given to such disguises. (31)

変装は、人間の外見と内面の間に連関を見る骨相学/観相学の拠って立つ論理的基盤を、一瞬の内に無効化する。CC というテキストが、人間の内面を読みとるべきものとしての顔貌を、繰り返しその中に刻み込んでいることは確認してきた通りだが、変装した顔は、そもそもそうした読解行為を許さない。以下の、マックス邸の隠し部屋の描写は、ステレオタイプに依存した外見の読解行為が徒爾に終わることを保証しているかのようだ。

Around the walls hung a multitude of costumes, male and female, of different sizes, and suited for all conditions of life. On the table were a collection of bottles, holding what I learned were hair dyes of different colors; and there was also an assortment of wigs, beards and mustaches of all hues. (38)

こうした変装道具が使用されている可能性を考慮しなければならないのであれば、マックスという人間に対して猜疑心を抱いたゲイブリエルが、直後に再度行う次のような分析に、どれだけの有効性を認めうるだろうか——“There was a manliness and kindness in his face [. . .]; although the square chin and projecting jaws and firm-set mouth indicated a nature that could be most dangerous [. . .].” (38-39)

人間の内面を表象するものとしての外見の信頼性が、決定的に失墜するのに伴って、人間の現存在自体がテキスト内でどれほど危険に晒されるかは、次のマックスの言葉からも明らかである。

[M]y identity is lost. Here I live, in my real appearance, under a false name. But I have a house elsewhere, in which I dwell disguised, but under a real name, and with an unreal character. [. . .] And so, with the real name and the unreal appearance and character in one place, and a false name, but the real appearance and character, in another, I lead a dual life and thwart the cunning of my enemies [. . .]. (101-02)

反復される“real”と“unreal”の反転は、この文を晦渋にしているだけでなく、CCにおいて密接に関連していなければならなかったはずの外見と内面との繋がりを希薄に、あるいは無効にしている。

以上で確認したように、このテキストにおいて、実のところ人間の外見と内面の結び付

きが常に既に崩れたものとしてあったことを確認した上であれば、次のような変装の事例を前にしても困惑することはないだろう。プリンスの邸宅に幽閉されたエステラを救出する方策を練る際、マックスの右腕であるルドルフが提案するのは、ある奇策である——“I will procure a gentleman's dress for Miss Estella; she is tall and will readily pass in the dark for a man.” (67) このテキスト空間においては、変装によって、いくなれば「ジェンダー改変」が現象することも可能なのだ。

CCというテキストを歴史化しつつ読解する作業の結果を総括しよう。ステレオタイプの差異化戦略を採用することで、移民を「我々」と「彼ら」として限定/再集合化し、更に骨相学/観相学的解釈コードを援用することで、外見と内面を連関したものとして言語化するこのテキストは、一見そのコードを補強するかのようにみえる変装という文学的装置を濫用することで、しかしそのコードが変装・演技によって再現可能であることを明らかにしてしまう。コードがコードとして機能するための前提を解体してしまうこのテキスト空間、ジェンダー改変さえ現出可能なこのテキスト空間では、人物の外見上において『「人種」/民族改変』が演じられる可能性も否定できないことが保証されているのであり、外見表象を重要な基礎として限定/再集合化された「我々」と「彼ら」の境界も、変装や演技によって横断可能であることが明らかになるのだ。

6. 反復される差異化

「破壊同盟」と「金権家集団」との全面抗争が招いた全世界規模の騒乱を逃れ、ゲイブリエルを含む少数の人々は最終の第40章 “The Garden in the Mountains” においてウガンダに辿り着き、その地に住む人々と共にユートピア的共同体の建設に乗り出す。皮肉なのは、移民集団を再集合化して構成された「我々」が、このテキスト末尾において再びアフリカへの「移民」となることであり¹³、それによりこのテキスト自体が、「我々」と「彼ら」を差異化する営為が常に失敗を運命付けられていることの証左の一つとして読めてしまうことだ。

山間の地で外界との接触を遮断したゲイブリエルらは、民主的な話し合いの後、生産業者・商人・文民の三部門から成る政体、“The People” を発足させる (356)。まさしくユートピア的に、“there is recognized no sort of difference between the dignity of the different sorts of work” とされる『顧みれば』の世界とは異なり (103)、ウガンダに敷かれた新政体では、“skilled labor” は “unskilled” よりも、“some forms of intellectual toil” は “any muscular exertion” よりも、“more valuable” とされる (359)。これらの組織的・階級的分化が、「我々」の中に新たに「彼ら」を作り出そうとする営為であることは指摘するまでもない。つまり、表象システムの論理的自己解体により、「我々」と「彼ら」の境界が横断可能なものであることを明らかにしてしまったはずのこのテキストは、「我々」の中から「彼ら」を生み出そうとする行為を不断に反復しつつ、その幕を閉じるのだ。こうして反復され続ける、価値

判断を込めつつ特定の集団を差異化する身振りは、このテキストのまさしく末尾に置かれた楽天的な一節——“[...] and God smiles down upon them from his throne beyond the stars.” (367) ——における「彼ら (them)」が誰を指すものなのかを、容易には推測させない。

註

- ¹ 本稿は、『東北アメリカ文化研究 第3号』(2002年6月20日発行)所収の拙論“Us/Them-Identification Collapsed: *Caesar's Column* as a (Mis) User of Pseudo-Science”を日本語化した上で、第4節への新たな引用資料の挿入や、書き下ろしの第6節の付加など、大規模な加筆修整を加えたものである。
- ² Jean Pfaelzerによれば、1886年から96年までだけに限っても、アメリカで100以上のユートピア/ディストピア小説が出版されたという(3)。
- ³ 先行研究の多くは、この作品の最大のテーマを「科学技術嫌悪 (techno-phobia)」とみているが、それはドネリーのポピュリスト/農本主義者としての側面に専ら注目した結果と考えられる。
- ⁴ なお、ドネリーには1882年にHarper and Brothers社から*Atlantis: The Antediluvian World*を出版しているという実績がある。
- ⁵ 失業率上昇のピーク時である1894年、就業可能人口の18.4パーセントが、あるいは4,612,000人の人間が、失業状態にあった(Pfaelzer 162)。
- ⁶ このスピーチの内容は、アメリカはヨーロッパからの移民を吸収することが可能であり、移民は恐怖の対象ではない、と説くものだった(Ridge 11)。
- ⁷ メアリーによる発音の表記例を列举する(65-66)。
“purty”=pretty
“belave”=believe
“kape”=keep
“rason”=reason
“ougly”=ugly
“wid”=with
- ⁸ ここに挙げた精神的属性の名称は、Nelson Sizerによる1877年の著作からとったもの(322)。
- ⁹ ドネリーが会員に選出された直接的理由は、アトランティス大陸が実在したという説を様々な二次資料を基に例証しようとした書物、*Atlantis* (1882年)の商業的成功である。
- ¹⁰ この引用中での一見不自然な段落の変更は、原テキストを可能な限り忠実に再現したものだ。
- ¹¹ プリントンの*Races of Peoples*と同年に出版された、ニューヨークの下層階級に関するルポルタージュ作品であるJacob Riisの*How the Other Half Lives*にも、次のように、顔貌を含む外見と「人種」/民族性との間に紐帯をみる思考が、鮮明に刻み込まれている。いわく、「ユダヤ人街 (Jewtown)」では、“the jargon of the street, the signs of the sidewalk, the manner and dress of the people, *their unmistakable physiognomy, betray their race at every step.*”(77 my emphasis)
- ¹² このプリンスと敵対する「破壊同盟」の参謀の人物は、「ロシア系ユダヤ人 (Russian Jew)」(147)と

されるが、名前を持たないこの人物の顔貌も、やはりゲイブリエルによって以下のように読解される。

The face was mean and sinister, two fangs alone remained in his mouth; his nose was hooked; the eyes were small, sharp, penetrating and restless; but the expanse of brow above them was grand and noble. [...] I should have picked him out anywhere as a very able and a very dangerous man. (172-73)

¹³ なお、この物語の末尾においては宗主国たるべきアメリカが血の海に沈んでいるため、ゲイブリエルら生存者たちを「植民者」と捉えることは、正鵠を射ているとは言い難い。

引用文献

- Bellamy, Edward. *Looking Backward: 2000-1887*. 1888. Introd. by Walter James Miller. New York: Signet Classic, 2000.
- Brinton, Daniel G. *Races of Peoples: Lectures on the Science of Ethnography*. New York: N. D. C. Hodges, 1890.
- Donnelly, Ignatius. *Caesar's Column: A Story of the Twentieth Century*. 1890. New York: AMS, 1981.
- Elliot, Emory, et al. eds. *The Columbia History of American Novel*. New York: Columbia UP, 1991.
- Hofstadter, Richard. *The Age of Reform: From Bryan to F.D.R.* New York: Vintage Books, 1955.
- Pfäelzer, Jean. *The Utopian Novel in America, 1886-1896: The Poetics of Form*. Pittsburgh: U of Pittsburgh P, 1984.
- Ridge, Martin. *Ignatius Donnelly: The Portrait of a Politician*. St. Paul: Minnesota Historical Society Press, 1991.
- Riis, Jacob. *How the Other Half Lives: Studies Among the Tenements of New York*. 1890. New York: Hill and Wang, 1967.
- Sizer, Nelson. *How to Teach: According to Temperament and Mental Development; Phrenology in the School-Room and the Family*. New York: S. R. Wells, 1877.
- Shurter, Robert L. *The Utopian Novel in America, 1865-1900*. New York: AMS, 1973.
- Tindall, George Brown, ed. *A Populist Reader: Selections from the Works of American Populist Leaders*. New York: Harper & Row, 1966.